大学院ＧＰ採択

# 心理臨床における「知」について

"Knowing" in Clinical Psychology

**研究代表者：河野一紀（D2）　　指導教員：大山泰宏**
**研究分担者：松本拓磨（D2）古川裕之（D2）**

**〔研究目的〕**

心理臨床というひとつの営みがその専門性を高め、社会的な関心も集めつつある現在、心理臨床という固有の領域から、その「知」の在り方を検討することは急務であると考えられる。そこで、本研究科において採択されている大学院教育支援改革プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」のプロジェクト名にも冠されている「臨床の知」という概念について検討していき、その在り方を明らかにしていくこと、さらには、その知が現在の心理臨床における実践と研究の在り方とどのように関わっているか考察することを、本研究では目的とした。

**〔研究経過〕**

本研究は、教育学研究科附属臨床教育実践研究センターやその他の現場におけるそれぞれのメンバーの臨床活動と文献研究の２本立てで進められた。文献研究に関しては、精神分析や分析心理学など今日の心理臨床にとっての基礎理論となる文献から、哲学や宗教学、文化人類学など人文科学全般にまたがる文献までを広く精読した。

また、本研究は、「心理臨床における「知」について―「非日常性」という概念を手掛かりに―」という昨年度の研究を引き継ぐかたちでおこなわれた。その研究では、「無意識」と「非日常性」と二つの概念の検討を通じて、伝統的認識論における「知」の在り方に収まらず、かつ単にそのオルタナティヴにはとどまらない「臨床の知」の在り方が提示された。ここからさらに進めて、本研究では、昨年度の研究では検討することができなかった、心理臨床における「関係」概念を扱うことを目的とした。

**〔研究成果〕**

本研究では、心理臨床における「知」という問題を扱うにあたって、「関係」という概念を取り上げた。従来、「関係」の回復という課題は、河合隼雄も指摘しているように近代科学の方法論に内在する主客分離という問題と関連付けて論じられることが多かった。しかし、この関係とは治療者と患者における二者関係の問題に限定して考えることはできない。そこで、「関係」という概念に関して、Freud,S.から今日に至る心理治療の理論的根幹ともいえる深層心理学という領域に固有の問題、すなわち、知と治療との密接な結び付きという問題から焦点を当てた。

上述の問題を論じるにあたって、本研究はFreudが提唱した、精神分析における「転移」概念について再考を行った。Freudにおいて、転移は治療における抵抗としてとらえられた概念であった。しかし、そこでは分析家と患者の間の単なる関係が問題となるのではなく、転移によって、分析家と患者双方と無意識との自己関係が、分析家と患者との関係に移し替えられ、それが分析において問題とされる、すなわち、分析における「知る」ということの対象となることを可能にするということが明らかになった。つまり、「転移」概念の考察から、「関係」概念は深層心理学において「知る」ということの必然的帰結として生じてくるということが指摘できた。また、本研究では、このような知見が、精神分析だけでなく、分析心理学をラディカルに再考しているGiegerich,W.が提唱した、「心理学の神経症」という問題にも見出すことができるということを指摘した。

このように、深層心理学において治療と一体となっている「知る」という営みは、自己関係におけるものであり、それはFreudが考えたように、自らの内にある裂け目、すなわち無意識の助けを借りてなされるものであるということが本研究から明らかになった。そして、ここから導き出される「臨床の知」とは、それ自体の中に裂け目をもっていて、ゆえに自己産出的な性質をもつという、力動的な概念なのであるということが指摘できた。

深層心理学によってもたらされるこのような知は、科学的な知がその拠り所とするような保証をもたない。しかし、深層心理学が科学としての妥当性を欠いているという主張は、我々が深層心理学を捨て去る理由にはならない。なぜならば、深層心理学は、その成立の時点で裂け目を内に含みこんだ思想であり、その固有性を無視することはできないからだ。つまり、深層心理学はこうした保証をもたない事態に対して「やりぬくこと」を、従事するものに要請するものである。そこで生まれるものがあるとしたら、それは「臨床の知」と呼べるものであろうと本研究から結論づけることができた。

なお、本研究の成果の一部は、2009年9月に開催された日本心理臨床学会第28回大会において発表された。